

担当部局

生活環境学専攻

評価項目 1	(ア) 体系的な履修を促す科目編成となっているか (イ) 開講科目数は履修登録者数、専任教員の担当状況から見て適切か
参照資料	・開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度） ・単位修得要領（カリキュラムマップ） ・カリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック） ・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3カ年） ・科目群別非常勤比率（3カ年程度） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 生活環境学専攻では、教育課程編成・実施の方針に基づき、教育課程を体系的に編成し実施している。本専攻では、生活環境に関わる食物栄養学領域と生活造形学領域の2領域を有している。共通科目として「生活環境学特殊研究」を開講し、食物栄養学、生活造形学、生活福祉学を専門とする教員各1名の3人体制でオムニバスの形式で授業を行ってきている。

専門領域別には、食物学および栄養学特殊研究、同特殊演習、アパレル造形学・空間造形学・生活文化学などの特殊研究および同特殊演習を設置し、専門性の高い研究を深める科目編成としている。

さらに、研究指導を毎年継続的に履修させることにより、最先端の課題研究の遂行を通じて、問題解決の手法、論理的な思考法、発展的課題の設定法、科学に関する倫理をより深く学ぶ編成となっている。その上で、研究の成果を国内外の学会や学術誌に発表し、プレゼンテーション能力を高めるとともに、最終的に、研究の成果を博士の学位論文として作成し、高度な専門的職業人および教育・研究者、指導者としての能力の確立を目指す科目編成となっている。

(イ) 2021年度食物栄養学領域は、D1が1名、D3が2名、活造形学領域は、再入学D1が1名、D2が1名、D3が1名であった。開講科目数は共通科目の生活環境学特殊研究も含めて食物栄養学領域12科目、生活造形学領域11であり、例年とほぼ同じであり、1昨年に本学を退職された生活環境学特殊研究の生活福祉学担当教員以外のすべての授業において、専任教員により授業が行われており、適切であると判断される。

【成果が上がっている点】

(ア) 教育課程は体系的に編成・実施され、その研究の成果は博士の学位論文として作成され、ほぼ毎年、博士の学位が授与されている。

(イ) 生活環境学専攻では、ほぼ継続的に大学院生が在籍しており、在籍者数はこの5年間平均で70%である。専任教員によって講義および研究指導が行われている。

担当部局

生活環境学専攻

【課題となっている点】

(ア) 特筆すべき事項なし

(イ) 特筆すべき事項なし

評価項目 2	各種アンケート結果等から見る、教育上で「成果があがっている点」・「課題となっている点」についての検証（※アセスメントブック検証結果から流用）
参照資料	・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3 カ年） ・ジェネリックスキル測定テスト結果（1→3 回生の伸長・3 カ年） ・アセスメントブック ・授業アンケート結果（学位プログラムレベル・3 カ年） ・大学院アンケート ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

2021 年度の大学院アンケートによると、家政学研究科全体としては 82.4%の回答率であり、各専攻の集計がされてないため他専攻の結果も含むが、重要なアンケート項目の履修指導、研究指導、大学院での学びについて、高い評価が得られている。よって、各大学院生の研究内容にそった授業や指導が行われていると判断される。

【成果が上がっている点】

2021 年度の大学院アンケート結果では、授業のレベルが適切であったという評価が 100%であり、一定の評価が得られていると判断される。

【課題となっている点】

2021 年度の大学院アンケート結果では、授業の内容が期待していた通りという評価が 28.6%であり、2020 年度よりやや低下している。他の項目の満足度が非常に高い割に、この項目のみ評価が低い理由が不明である。おそらく、博士論文に直接寄与しない授業に対しての不満が大きいと予想されるがその理由について要因を分析する必要がある。

担当部局

生活環境学専攻

評価項目 3	(ア) 成績評価、フィードバックは、シラバスに基づき、適切に実施されているか。 (イ) 成績分布に偏りは生じていないか。
参照資料	・成績分布（G P A・得点）（科目群別・3 カ年） ・ALCS 学修行動比較調査（対象設問） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）直接の関連性はないが、2021 年度の大学院アンケートは（家政学研究科全体の結果が示されており、各専攻の集計がされてないため他専攻の結果も含む）、大学院での学びについて高い評価が得られており、成績評価、フィードバックは適切であったのではないかと考えられる。

（イ）直接の関連性はないが、上記と同様に、2021 年度の大学院アンケートでは、大学院での学びについて高い評価が得られており、成績分布について学生の不満はない。学生数が少ないので絶対評価で行われている。

【成果が上がっている点】

（ア）特筆すべき事項なし

（イ）特筆すべき事項なし

【課題となっている点】

（ア）特筆すべき事項なし

（イ）特筆すべき事項なし

評価項目 4	(ア) カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置しているか。 (イ) 非常勤比率の高いカリキュラムとなっていないか。
参照資料	・授業担当一覧 ・科目群別非常勤比率（3 カ年程度） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）食物栄養学領域では、専門分野の食物学および栄養学特殊研究、食物栄養学特殊演習、研究指導を配置している。生活造形学領域では、専門分野のアパレル造形学、空間造形学および生活文化学特殊研究、生活造形学特殊演習、研究指導を配置している。また、両領域の共通科目として生活環境学特殊

担当部局

生活環境学専攻

研究を配置している。2021 年度は、生活環境学特殊研究の生活福祉学担当教員（5/15 回）以外は、すべて専任教員が担当している。

（イ）食物栄養学、生活造形学領域では、上記のように共通科目である生活環境学特殊研究（5/15 回）以外は、すべて、専任教員が担当している。

【成果が上がっている点】

（ア）特筆すべき事項なし

（イ）特筆すべき事項なし

【課題となっている点】

（ア）特筆すべき事項なし

（イ）特筆すべき事項なし

評価項目 5	学科・専攻等個別の FD 活動について、どのような内容・目的で実施しているか。
参照資料	・ FD の取り組み状況 ・ 前年度点検シート ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

家政学研究科生活環境学専攻では、食物栄養学および生活造形学（アパレル造形学、空間造形学、生活文化学の 3 研究領域）から構成されるため、異なる研究領域間での研究指導方法を学ぶ機会を設けている。博士後期課程における博士論文の中間発表（あるいは事前発表）・公聴会に、専攻あるいは研究科の全教員が出席し、意見交換を行っている。教員各自の研究指導方法を見直し、教育の質的向上および改善に資することを目的として、異分野の研究発表を聴く機会を複数回設けている。

なお、食物栄養学領域では、2021 年度は、2020 年度と同様に学科の FD と共同して外部講師を依頼し、「発達障害の傾向を持つ学生の理解と対応」というテーマで講演会を行い、教育に資する FD を行った。大学院は学部の延長にあり、学部教育に関する FD でも大学院教育の参考になると考えられた。

【成果が上がっている点】

特筆すべき事項なし

【課題となっている点】

特筆すべき事項なし

担当部局

生活環境学専攻

評価項目 6	(ア) 職位、年齢、性別のバランスに配慮した教員組織編成をおこなっているか。 (イ) カリキュラムに基づく教員組織となっているか
参照資料	・教員組織編制方針 ・専任教員の状況 ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 食物栄養学領域の大学院教員組織は、2022 年 3 月には指導教員 1 名の定年退職があったが、同年 4 月から指導教員 1 名が増えた。よって、食物栄養学領域では、指導教員 6 名、指導補助教員 1 名となっており、年齢構成は 40 代から 60 代まで分布し、職位は教授である。男女比は 5:2 であった。

また、生活造形学領域の大学院教員組織は、2022 年 3 月には指導教員 2 名の定年退職があったが、同年 4 月から指導教員 1 名が増えた。よって、生活造形学領域では、指導教員 4 名、指導補助教員 1 名となっており、年齢構成は 40 代から 60 代まで分布し、職位は教授である。男女比は 4:1 であった。

以上、大学院の博士後期課程の教員組織としては問題ないと判断される。

(イ) 教員は食物栄養学領域の専門分野の基本となる食物学および栄養学分野、生活造形学領域の専門分野の基本となるアパレル造形学、空間造形学および生活文化学分野に適切に配置されている。

【成果が上がっている点】

(ア) 特筆すべき事項なし

(イ) 特筆すべき事項なし

【課題となっている点】

(ア) 特筆すべき事項なし

(イ) 特筆すべき事項なし

実施責任者からの具体的な向上・改善施策（案）

具体的な向上・改善施策（案）について

家政学研究科生活環境学専攻は、博士前期課程の食物栄養学専攻および生活造形学専攻の 2 専攻の上にある、家政学研究科博士後期課程である。生活環境学専攻の 2018-2022 の入学者定員充足率平均は、70.0%と比較的高い。しかし、定員 2 人に対して、2019 年 3 人、2021 年 0 人と変動している。このことを考えると、博士前期課程の 2 専攻を 1 専攻として定員充足率の平準化と向上に繋げる必要があると考えられ

担当部局

生活環境学専攻

る。抜本的な大学院改革を行い、早急に改善する必要がある。

博士前期課程の食物栄養学専攻および生活造形学専攻では、すでに修士論文発表会を共同で実施し、異分野交流がなされている。生活環境学専攻においても原則として、全教員の出席のもと異分野教員からの指導も受けられる体制となっている。学生の満足度も高く、博士論文の指導も着実に行われており、問題ないと思われる。